人形劇で育つ子どもたち

小林
美実

今年の夏、幼児のための人形劇や参加劇をしている仲間に十六人とドイツへ行った。子どもたちのための人形劇が見たい、そして一回だけ、私たちもドイツの子どもたちの前で人形劇を演じてみたい。そんな願いをドイツの友人に伝え、出発した。何といっても大正時代倉敷恵三先生。ヨーロッパの幼稚園で、北ドイツのハノーブルに五日間滞在した。ここの三十年前、半年間、私がはじめて保育の研修をしたところである。さっそく小学校で交通安全教育の人形劇があるという情報が入った。演じるのは、警察や消防の人たちによる腹話術、紙芝居などがある。比較もできると楽しみにかけた。
会場はブレイルームのようなホール、まわりの少々高くなっている所に人形劇の舞台がつくられ、中央の低いスペースに椅子がならべている。制服を着たお巡りさんが三名、準備をしながら笑顔で迎えてくれた。いよいよ子どもたちが三三五五人ってくらい、それは舞台の前の丸椅子に座った二人のお巡りさん、 behandらん。ああ、元気にしてるかい？手に持ってあるの、なあ？など子どもたちに声をかけて迎え、しばらくの間子どもたちにひとりきり会話ははずむが、そのおしゃべりの中から、八月の誕生日の子どもたちを見つ出しながら舞台の前で、自分にそっくらなあつつ人形その子どもたちの愉快な「なぞなぞ」の入った会話をした。子どもたちは二人の会話を決して邪魔せず、しかし何か言いたい時は手の挙げたリードのみごとだが、大勢集まったところでの態度や発言のしかたをわきまえているらしい子どもたちはもれさし、その内容は「カスパー」と「交通規則」に沿ったもので、子どもたちのワクワク感をしています。持ちの間に入りひろげられるスピードがある動きは、子どもたちの応酬に、体をゆすることばを発して応援したり意見をいったしたりする。カスパーも子どもたちに質問し、意見を与えます。ドイツ語がわからない私たちに、子どもたちのワクワク感を引き起こすその会話は伝わって来ます。びっくりしたことは、子どもたちのことをはや歓声が、決して劇の邪魔にならないことである。そしてカスパーの問いかけに対する意見ののわるふけや、かかるらしい発言や行動がない。他の子どもたちが発言している時は呆っている。二回目の公演は、小学校二年生、もう日本では
「人形劇なんか！」という年齢である。一回目より内容が少し複雑であったが、交通安全教育を目的としていることでは同じである。しかし、この子どもたちはもっと発言が多く、カスパーや時の劇の中で子どもたちと討論まではじめての人が愉快だった。

さて、人形劇の中で子どもたちが意見を言い、それに人形が答えるならストーリーが展開していくというやり方は日本では珍しいだろう。今、日本でも子供たちが劇に興味をもって劇の世界に集中して見ようとして、積極的に子どもにはたらきかけることが試みられている。例えば、人形や俳優の誘いで劇中一緒に歌う、「ヨイショ、ヨイショ」と掛け声をかける。どこも行った？」の質問に答えながら人形劇の子どもたちの参加はどのようなものではない。答えるだけでなく、自分の考えを述べるのである。というと、きっと何を考えるのか、子どもたちの発言が何かわかり過ぎて、ストーリーが進まなくなってしまう場面がある。子どもたちが観客席で人形のように笑ってまわったりしないだろうか。保育でもこういう場面がある。子どもたちの発言までに心配は全くない。大勢が

▲発言したい子はこうして人さし指を高くさし上げる
しゃべりたい時は、みんなさっと片手を上げ、人さ
指をつけ立てる。その中からスパーが「だれ
にしようかな」と面白いくせにふやしそのさで選ぶ。
そして発言をうまく誘導したり、みんなが納得する
ような方法で発言を整理してストーリーが進むよう
にリードしていく。
どうして保育者でもないお巡りさんが、子どもに
対して保育者顔負けの即興的な柔軟な対応が出来る
のだろう。その都度子どもたちの反応が違うだろうに
私たちは、お巡りさんは二回目の舞台の後で見る
ようになる。「我々はどのように劇をするかはい
るか、みてごらん」というわけである。

舞台裏からみて Moderate things, ストーリーは決
ている。重要なのは、それがストーリーを
すすめる上で大事なキーワードだから、必死い
い。しかしその間は常に自由に即興的に満ちているので
子どもなりの間は本当に自由に即興に満ちているので
ある。舞台のけこみにぶつけの小さい穴があい
ている（日本とちがい、舞台のけこみは高く、腕
をいっぱいにのばして人形をつかうので、違い手は
けこみの上から子どもを見ることができていない）
時々、特に子どもたちの反応が大きい時、そこから
カスパー役の違い手が、「もう少しこのまま続けよ
う」「さあ、先にすすむぞ」と目くばせや手や肘や
他の違い手も穴からの違いは助言をする。子ども
のことは実に嬉しそうに聞き、本当に面白そう
に穴からのぞいている。見ている私たちに、心か
ら子どもが好きで人形が好きなこの人形の違い手た
ちの気持ちがよく伝わった。

このお巡りさんのグループのリーダーはカスパー
役の人が、七女のキャラクターをもつ。勿論、警察官
になるために警察に入ったのだが、ある時警察人
形劇で交通安全の教育をするグループがあることを
知り、そのメンバーとなったそうである。彼らの日
交通安全教育のための人形劇をするお巡りさん。中央がカスパー役のリーダー。下に並んだ人形達が登場人物。（舞台の裏側で）

常は、幼稚園、小学校を公演してまわる彼は、人形劇の創成と練習の毎日とな。その練習量、体で感じ、自分たちの演技を磨いている。

公演回数からいってプロといいてもよいだろう。その目的は、交通教育という目的をもっていることである。

教育という目的を持たなから、この人形劇がたいそう面白く愉快なものかせんだろう。まず「カスパー」の面白さで、この人形劇に参る勇気があって機転がきいてユーモアのある愉快なキャラクター。昔は多くの国の公の道を作る人々がそうであったように、時の権力者をとらえ、ユーモアで批判し、やおれない民衆の味方の道化だった。今は子どもたちの人形劇の主人公になった。しかし、その道化の才あれば、その性格も醸し出し、愉快な正義の味方であることにかわりはない。しかも好奇心が旺盛で冒険心があり、多少おっちょこinations
かあって、子どもたちにとって、劇中発言すること
で参加する人形劇がいかに自然なものになっている
かがよくわかった。

人形劇を面白く気持ちいい公演にしていく理由の
一つに、観客である子どもたちがある。大きい障害
者施設内の小学校で障害児を含む、四年生約五十
名に私たちが公演した時のことである。ことばの間

小さい短いドラマが生まれていると感じた。あっ、こ
どもたちは、日本の子どもたちのように、幼稚園や

学校で発表会を目的に劇の練習を毎日毎日やらされ
たりするほどではない。しかし、いかに日常的に劇的
なましびを楽しむ、人形劇などのよき観客になって
いるか、ということだろう。つまり人形劇をはじ

子どもの文化として劇的なもののがしっかり生活
の中に根づき、それにによって子どもたちがすぐに
育っているのである。マックス・ヤコブの自叙伝を
読むと、彼が子どものためのカスパー劇を始めたこ

人形を全部出してみた。それからの子どもたちの行
動は実に感動的だった。手にすると、近くの友達と

日本では住々にして乱暴にあつかう子どもがいる。人
形で話しかけ、抱き合い、ゆっくりからみあう。
テーマがある。アジア各地域にも、インドネシアのワ
ヤンのようなすばらしいものが沢山ある。しかしこ
から子どものためのものを生み出すことはまだ出
ていない。そこで、あそびや祭や習慣の伝承を含
め、難しい問題がある。これらのこと、子どもの文化
をめぐる大きな問題だろう。
ドイツには、ミュンヘンのマリオネット劇場のよ
うな大変芸術性の高い人形劇もある。カスパーで
った人々は、大人になってからも人形劇の面白さ
に堪能しているのである。ハングルを離れると
はたくさんの人形劇の演目が紹介されていた。今週休日に
一緒に行うと子どもたちが、お父さんやお母さんと
に浮かんでくる。

※文中のマックス・ヤコブに関することの引用は清水
俊弁訳 "マックス・ヤコブ自叙伝。二九六年十月
出版。本书は、人形劇団ブーク日本ユニマ (Ο三
単三単九〇) で購入可能です。" より
※マックス・ヤコブについて
一九五年九六九 絢生 一九五九一九六九
ユーマ (国際人形劇連盟) 会長